

2008年7月22日

報道関係各社 御中

社団法人 日本機械学会
広報・情報部 会

2008年の認定「機械遺産」が決まる！ - 日本の社会、産業を支えた施設・製品6件を選定 -

社団法人日本機械学会は、日本国内に現存する歴史的に意義のある「機械遺産」6件を選定、8月7日の機械の日に認定表彰を行います。認定機械遺産は2007年に発足した新事業で、前年（25件）に続き今年で2回目。約60件の応募・推薦の中から審査の上、日本の社会、産業を支えた施設や乗り物、独自の計算機などを認定表彰することが決まりました。この認定表彰は本会が行う重要な事業として、来年以降も毎年継続する方針です。

認定「機械遺産」とは

認定「機械遺産」とは、日本国内の機械技術面で歴史的意義のある「機械遺産」(Mechanical Engineering Heritage)を認定することで、文化遺産として大切に保存し、次世代に伝承することを目的とする事業です。2007年6月に日本機械学会が創立110年を迎えたのを機に、記念事業の一環としてスタートしました。認定対象は原則として Site (歴史的景観を構成する機械遺産) Landmark (機械を含む象徴的な建造物・構造物) Collection (保存・収集された機械) Documents (歴史的意義のある機械関連文書類) の4分野の機械遺産。会員から応募・推薦のあった候補について、本会の機械遺産委員会で選定・評価を行い、監修委員会の総合評価を経て最終的に候補を絞り込み、理事会で承認されたものを「機械遺産」として認定表彰するものです。

2008年はSite2件、Collection4件を選定

1回目の2007年はSiteとLandmarkの各1件、Collection21件、さらにDocuments(記録に残る機械関連文書類)2件の25件を認定しました。2008年の認定「機械遺産」は、三居沢発電所関係機器・資料群(仙台市青葉区) 三池港水圧式閘門と蒸気式浮クレーン(福岡県大牟田市)のSite2件と、円太郎バス(東京都千代田区) 機械式通信機器群(岩手県花巻市) 自働算盤<機械式卓上計算機>(福岡県北九州市) 電機事業創業期の国産誘導電動機および設計図面(茨城県日立市)のCollection4件。合計で6件です。詳細は次ページ以降をご参照ください。

【本件に関する問い合わせ先】

〒160-0016 東京都新宿区信濃町35番地 信濃町煉瓦館5階
社団法人 日本機械学会
会員・情報管理グループ 野口明生
電話：(03) 5360-3503、FAX：(03) 5360-3508
E-mail：noguchi@jsme.or.jp

2008年「機械遺産」認定表彰6件の概要

(1) 三居沢発電所関係機器・資料群

カテゴリー：Site

三居沢発電所は、1888（明治21）年に宮城紡績会社が日本で初めて水力発電により電灯の明かりを点した発電所。その後、水車発電機の容量変更などを経て、1910（明治43）年から運転を継続している現役の発電所である。当時の水路跡のレンガ構造物が残存し、建屋は登録有形文化財に指定されている。発電機は1924（大正13）年、ドイツ・シーメンス社製のもので、一部原型を残す形で使用されている。1951（昭和26）年に東北電力株式が継承。隣接する三居沢電気百年館には、当時と同型の工部大学設計の5kW直流発電機が保存展示されている。



(2) 三池港水圧式閘門と蒸気式浮クレーン

カテゴリー：Site

1908（明治41）年に築港された福岡県大牟田市の三池港に残る水圧式閘門と蒸気式浮クレーン。干満の差が大きい有明海との間で大型船を出入りさせるため、当時の技師（後の三井合名会社理事長）団 琢磨らによって採用された。内外港を隔てる閘門は英国製で、観音開きの扉は水圧で駆動する。満潮時には扉を開いて船舶を出入りさせ、干潮時には扉を閉じて内港内の水位を保つ。内港には蒸気駆動式の浮クレーン「大金剛丸」も稼働しており、明治以降、日本の近代化に大きく貢献した石炭産業の機械技術が残る貴重なサイトである。



(3) 円太郎バス（フォードTT型）

カテゴリー：Collection

1923（大正12）年の関東大震災で被災した東京市内の路面電車の代替交通手段として、東京市電気局がアメリカ・フォード社から貨物自動車用シャシを緊急輸入し、これに木製車体（客室）を新製してバスにしたもの。「円太郎」の名前は、明治初期の落語家四代目橋円太郎が乗合馬車の御者が吹くラッパを演じ「円太郎馬車」と呼ばれたことに由来する。車体前方のガソリン機関から推進軸が床下後方に伸び、後軸をウォームギアで駆動し、運転席床上には運転用足踏みペダルが3本取り付けられている。国内では現存最古のバス。



(4) 機械式通信機器群 (谷村株式会社新興製作所製)

カテゴリー：Collection

岩手県花巻市の谷村(株)新興製作所には、鍵盤鑽孔機をはじめ、戦後の産業界を支えた通信機器が数多く残る。鍵盤鑽孔機は、終戦直後、GHQ の指令で国内電信網を復旧するに当たり、モールス式音響通信からカナ現字式に仕様変更されることを受けて、初めて国産開発された機械である。このほか同社のショールームには、一時は国内シェア 100%を誇ったテレックスをはじめ、三段シフト式カナ欧文テレプリンタ、新聞用漢字テレプリンタなど、昭和 20 年代から 40 年代にかけて活躍した製品が、現行生産品と並んで展示されている。



(5) 自動算盤 (機械式卓上計算機) パテント・ヤズ・アリスモメトール

カテゴリー：Collection

現存する最古の国産機械式計算機。1902 (明治 35) 年に矢頭良一が発明し、翌年に特許を取得して製造したものの。歯車式の計算機で、1 個の円筒と 22 枚の歯車から成り、数値入力に算盤と同じ 2 進法・5 進法を採用した独特の機構を持つ。乗除の際の桁送りが自動で行え、演算終了時には自動停止するなど、当時の海外の計算機と比べても性能面で優っている。1 台 250 円の価格で約 200 台が当時の陸軍省、内務省、農事試験場などに販売された。エンジン付き飛行機の研究資金を得るために作ったといわれ、その後計算機の製造は行われなかった。



(6) 電機事業創業期の国産誘導電動機および設計図面

カテゴリー：Collection

日本の電機事業創業期に製造された 5 馬力誘導電動機とその設計図面。茨城県日立市の(株)日立製作所日立事業所内の小平記念館に現存する。電動機は久原鉦業所日立鉦山工作課長、小平浪平の指導のもと、純国産技術だけで 1910 (明治 43) 年に設計・製造された記念碑的製品であり、「製造番号第 1 号」の銘板を持つ。設計図面は高尾直三郎によるもの。誘導電動機を製造した電機修繕工場は後に「創業小屋」と呼ばれ、創業精神を後世に伝えようと 1956 (昭和 31) 年、日立事業所内に復元された。20 世紀初期の国内電機製造技術の高さを示している。

